

法蔵における四宗判の展開

Daniel Wickstrom

法蔵（643年—712年）の華嚴教学は『五教章』と『探玄記』によって組織された。それらの中に、法蔵は五教十宗判によって『華嚴経』を別教一乗と位置付けたが、晩年の著作にもう一つの教判を示すに至った。それは今、問題とする四宗判である。

四宗判を扱う著作は『探玄記』と同時期に著した『大乘起信論義記』と『法界無差別論疏』と最晩年の著作となる『入楞伽心玄義』という三部である。法蔵自身が五教十宗判と四宗判の関係を明確にしないものの、晩年になるほど四宗判がより重要な役割を担うこととなった。

法蔵の四宗判は如来蔵思想を大乘仏教の中に一学説として位置付け、他の小乗教と大乘教とを対比するものである。初めて四宗判を述べた著作は『起信論義記』であるが、四宗判の原型はすでに『探玄記』に確認することができる。四宗判は、一隨相法執宗（小乗）、二真空無相宗（中観学派）、三唯識法相宗（唯識学派）、四如来蔵縁起宗（堅慧などの学派）という四宗よりなる。この中、如来蔵縁起宗に最上の位置を与え、それを他の教説とけじめを付けるのである。

法蔵が四宗判を形成した要因の一つは玄奘門下が玄奘の新訳を以て真諦の学説（一乗真実）を批判したのに対する反駁を示すためと推測する。その背景には、法蔵が地婆訶羅三蔵との出会いによって当時のインドにおける戒賢と智光の論争を聞き得て、二者の論争を会通した結果、四宗判を生み出した、と考える。

さらに、提雲般若の新訳『大乘法界無差別論』を如来蔵縁起宗の新たな資

料として扱うことにより、法蔵は自分の学説をインドに辿り付かせ、玄奘門下からの批判を乗り越えることができた。したがって、四宗判は主に唯識説と如来蔵説の間に一線を画する意志を有するものである。以上、本発表は『無差別論疏』における四宗判の展開について一考察を加えてみたものである。

(博士後期課程二年生)